様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：２１４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｋ１７９７７

研究課題名（和文）文学・文化研究におけるアニマル・スタディーズの発展と動向

研究課題名（英文）Development of Animal Studies in Literature and Cultural Studies

研究代表者
江口　真規（Eguchi, Maki）

秋田県立大学・総合科学教育研究センター・助教

研究者番号：３０７７９６２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：アニマル・スタディーズの発展の経緯や現状についての調査を行った結果、（1）動物に関する議論に多角的な視野を与えるためにも西欧中心的な立場からの転換が必要であること、（2）動物擁護や食事など動物に対する立場や主観に制限されない方法論として広がりを見せていること、（3）環境・社会問題に実践的に関与していく姿勢が明らかになった。これらの情報収集の成果を国内外で発表したほか、日本でのアニマル・スタディーズの理論応用の一例として、単著『日本近現代文学における羊の表象――漱石から春樹まで』（彩流社、2018年）を刊行することにより、動物という観点からの日本文学研究の枠組みと方法論を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で調査を行ったアニマル・スタディーズの理論と方法論は、文学に限らず、動物に関わる人文学・自然科学の種々の分野において活用されるものである。その関心は、畜産動物の権利や生物の安楽死など、農業、食、医療、福祉といった広範囲にわたる。本研究で得られた複数領域の研究者ネットワークと、地域における実践的な教育活動を通して、既存の学問分野にとらわれないアニマル・スタディーズの学際的な知のあり方の一端を示した。
また、日本文学・文化の動物の事例を紹介することで、西欧中心主義的なアニマル・スタディーズの議論に多角的な視野を提供するとともに、海外における日本文化の理解促進に努めた。

研究成果の概要（英文）：Through examining the recent emergence of Animal Studies, this research shows that (1) a transition from Western-centered perspectives is necessary for the discipline to stimulate discussions on animals, (2) the study can be approached through any academic lens toward animals, including advocacy for nonhumans and dietary habits, and (3) it is actively and practically involved with environmental and social problems. This information is presented and shared at domestic and international conferences on animals, literature, and cultural studies. As an example of the analysis of animals in Japan, the representative researcher published a book titled The Representation of Sheep in Modern Japanese Literature: From Soseki Natsume to Haruki Murakami (Tokyo: Sairyusha, 2018), which provides literary studies in Japan with a framework and methodology for analysis of perspectives on animals.

研究分野：比較文学・文化、文学理論、アニマル・スタディーズ

キーワード：アニマル・スタディーズ　動物　文学論　震災後文学　海外における日本文学・日本文化　羊

１．研究開始当初の背景

アニマル・スタディーズとは、動物と人間の関係や共生のあり方を考察するための人文学や自然科学を融合した研究の枠組みであり、近年では欧米を中心に学際研究の一領域として成立している。文学・文化研究においては、ポストコロニアル批評やエコクリティシズム（環境批評）の系譜を継承し、他者表象としての動物に着目した研究が 1980 年代以降精力的に試みられてきた。

アニマル・スタディーズの理論形成においては、動物と人間とを明確に区別してきた西欧近代哲学とその批判が基盤となっており、文学研究においても、西欧文学・英語圏文学が分析の主流を占めている。非西欧社会や旧植民地、あるいは今日のグローバル社会の中で環境的負荷を担う地域を描いた文学作品を通して、自然と社会について考究するポストコロニアル・エコクリティシズムと称される研究方法が模索されてもいる（Graham Huggan and Helen Tiffin, *Postcolonial Ecocriticism: Literature, Animals, Environment,* 2nd ed (London: Routledge, 2015) 3-11）。しかし、各文化の動物観や個々の生物種を扱った議論は深められておらず、非西欧圏を対象とした研究は限られている。

日本国内では、2000 年代後半以降、歴史学、法学、表象文化論等の各分野において、動物をテーマとしたワークショップやシンポジウムが頻繁に開催されており、文学・文化研究でも英米文学作品を対象とした読解が行われつつある。しかし、各分野間の情報共有の機会は少なく、分野横断的なアニマル・スタディーズの方法論や研究成果が日本で認知されているとは言い難い。また、アニマル・スタディーズの日本文化・文学への応用は十分になされていないのが現状である。キリスト教思想や西欧哲学を基盤とするアニマル・スタディーズの理論が日本の動物の事例を考察する際にどの程度適用されうるのか、検討の余地がある。

これまで、研究代表者は、アニマル・スタディーズの理論と手法を用いて、日本近現代文学における羊の表象の分析を行い、また国際学会への参加を通して研究者同士の情報交換を行ってきた。アニマル・スタディーズの学会では東アジア圏からの参加者は稀有であり、日本の動物に関しては、捕鯨や日本食といった一部の情報しか国際社会で共有されていないために偏見が生じている現状を知った。その一方で、仏教国、技術国としての日本の動物観や、ポップカルチャーの中の動物表象、東日本大震災以後の環境や生命に対する認識の変化に関心を抱く参加者も存在した。

これらの活動を通して、国内においては、国外のアニマル・スタディーズの論点と動向が認知されていないために生産的な研究成果が得難い状況にあること、そして国外においては、日本の動物に関する研究や情報が十分に共有されていないということがわかった。アニマル・スタディーズの現状把握と、日本文化を事例とした研究成果の発表は喫緊の課題であり、今回の研究の着想を得た。

２．研究の目的

本研究は、アニマル・スタディーズと称される新興学問分野の発展の経緯と現状について、文学・文化研究の観点から調査することを目的とする。本研究では、欧米を中心としたアニマル・スタディーズの動向と議論点を分析し、日本語で集成する。また、それらが日本でどのように受容され発展しているのか、日本文化と動物に関する研究事例を発表することによって、アニマル・スタディーズの議論の多様化に寄与する。本研究課題の遂行を通して、日本の文学作品や文化事象をアニマル・スタディーズの手法と理論を用いて分析・発表することが可能となり、動物の研究を通して海外における日本文化の発信と理解促進をはかる。

二年間の研究期間では、次の二点についての研究を中心的に行った。

（1）海外におけるアニマル・スタディーズについての情報収集

アニマル・スタディーズ関連の文献と資料の収集を行い、以下①～⑤の情報を日本語で集成する。これにより、アニマル・スタディーズという理論・方法論が存在するということ、それによってどのような研究成果がみられているのかを、日本国内の文学・文化研究界において周知する。

①アニマル・スタディーズが興隆した文化的・社会的背景
②アニマル・スタディーズで議論されている問題とその変遷（例：動物倫理、肉食の是非）
③分析対象とされる主要な文学作品（例：J・M・クッツェー『動物のいのち』（1999））
④アニマル・スタディーズの主要参考文献
⑤アニマル・スタディーズの学習の機会が提供されている教育研究機関

①～④に関しては、アニマル・スタディーズの議論の前提となる哲学・科学史・文学作品等の基本文献の精読を欠かすことができない。⑤に関しては、アニマル・スタディーズの学習の機会が提供されている教育研究機関やそのカリキュラム、授業科目を調査する。これにより、アニマル・スタディーズにはどのような教育的波及効果や社会的還元が求められているのかを明らかにする。

（2）日本国内におけるアニマル・スタディーズについての情報収集

日本における文学・文化研究での動物に関する研究動向を調査し、国外のアニマル・スタディーズ学会で口頭発表を行う。日本ではアニマル・スタディーズという分類の上では研究が行われていないが、文学・哲学・歴史学・表象文化などの人文学各分野で動物について考察した研究成果がみられる。これらの動向を、独立した各分野ではなく、国際的な「アニマル・スタディーズ」の潮流の中の成果として捉え、日本の研究事例を英語で海外に紹介する。

３．研究の方法

（1）海外におけるアニマル・スタディーズについての情報収集

①アニマル・スタディーズ関連の学会で得られた情報や、書籍・論文を精読し、アニマル・スタディーズの概要や研究成果を収集・整理しデータ化する。各書籍の概要と日本語翻訳の有無の情報を含む、主要参考文献リストの作成に取りかかる。

②アニマル・スタディーズ関連の教育研究機関の現状を把握するため、アニマル・スタディーズの授業科目が開設されている機関の情報を整理する。

③アニマル・スタディーズの国際学会に参加することにより、新たな研究者ネットワークを構築し、各地域の動向について情報を収集する。

（2）日本国内におけるアニマル・スタディーズについての情報収集

①日本国内において開催された、アニマル・スタディーズに関連する学会の概要や研究成果を収集・整理する。具体的には、日本アメリカ文学会、日本比較文学会、ASLE-Japan／文学・環境学会、ヒトと動物の関係学会等で行われたシンポジウム、研究会の発表内容をデータ化する。

②①の学会に参加することで、日本の動物に関する研究の動向を調査する。

③アニマル・スタディーズの国際学会において、日本でのアニマル・スタディーズの現状や問題点を報告し、討議を行う。

４．研究成果

本研究では、二年間の研究期間を通して国内外の様々な学会に参加することにより、アニマル・スタディーズの現状と問題点を把握し、複数の領域をまたぐ研究者のネットワークを構築した。比較文学会、文学・環境学会／ASLE-Japan、世界文学・語圏横断ネットワーク研究集会、村上春樹国際シンポジウム等の文学領域の学会のほか、ヒトと動物の関係学会、慶應義塾大学動物社会文化論研究会や、国際学会 Minding Animals Conference、Living with Animals Conference など、動物学や心理学を基盤とする研究会にも参加し、情報交換・議論を行った。

国内の学会では、海外のアニマル・スタディーズに関する情報収集の成果を発表し、その概要や課題についての情報提供を行った。国際学会では、日本のアニマル・スタディーズの現状を発表したほか、アニマル・スタディーズのカリキュラムや授業概要に関するデータも入手することができた。

これらの活動から得られた成果は、主に次の三点にまとめられる。

（1）アニマル・スタディーズの問題点の把握

①アニマル・スタディーズの西欧中心主義

「動物」という概念や、個々の生物種の意義やイメージは、生息分布状況や宗教などの要因によって異なる。そのため、各地域の文化・社会現象を論じる際に、一概にアニマル・スタディーズの理論を応用することには注意を要する。しかし、西欧近代哲学に基づくアニマル・スタディーズでは、西欧文化や英語圏文学が分析対象の主流を占めている。事実、参照される文学作品の多くは、ジャック・ロンドンやフランツ・カフカ、J・M・クッツェーなど、西欧の作品あるいは英語で著わされたものが多い。また、各文化の動物観や個々の生物種に関する考察は深められておらず、「動物」という枠に括られることでその差異が見落とされがちである。領域・文化横断的な手法をとるアニマル・スタディーズが、人間と動物について考えるとき、西欧思想に基づいた観点だけではその発展に限界がある。

日本国内でも文学・文化研究の分野で動物への関心が高まりつつあり、シンポジウムやワークショップが開催されている。さらに、2020 年の東京オリンピック開催を控え、選手や外国人観光客への食事の提供に関して、アニマル・ウェルフェア（動物の福祉）やベジタリアン、ヴィーガン（絶対菜食主義者）という概念も広まりつつある。しかし、動物をめぐる国際的な議論がなぜ今生じているのか、その歴史的・社会的背景について説明されることは少ない。また、西欧の理論が紹介されるに留まり、日本文化における動物については包括的に討議されていないのが現状である。

②作家研究・作品研究の一環としての動物

文学・文化研究における動物の研究に関しては、特に次のような問題が生じていることがわかった。海外の文学研究での動物への関心の高まりを受け、国内でも動物に関する研究が進められている。しかし、文学研究の一手法としてアニマル・スタディーズが普及すれば、本来そこに包含されていたアクティビズムとの結び付き（(3）参照）が希薄化しかねない。それは、アニマル・スタディーズが動物を研究するという目的ではなく、作家研究・作品研究の一環として用いられることが多くなるからである。理論や方法論が普及すればするほど、動物が理論

のための道具になりかねないことは、アニマル・スタディーズに付随する懸念の一つである（Kari Weil, *Thinking Animals: Why Animal Studies Now?* (New York: Columbia UP, 2012) 16）。日本の文学研究はまさにこの問題に直面しており、アニマル・スタディーズの研究基盤が日本で確立されていないことに一因があると考えられる。

③「アニマル・スタディーズ」と「アニマリティ・スタディーズ」

②に関連して、アニマル・スタディーズが盛んになるにつれ、様々な方法論や立場が生じてきていることもわかった。例えばそれは、「アニマル・スタディーズ」と「アニマリティ・スタディーズ」（animality studies）の違いに見受けられる。前者が人間と動物の違いや主体性を問題とし、「本物の」動物の保護に明確な関心を示すのに対し、後者は人間の社会・文化との関係から動物性の歴史を強調し、「本物の」動物が研究の対象となっているかどうかや動物保護に対する姿勢は問われない（Michael Lundblad, “From Animal to Animality Studies” PMLA 124.2 (2009) 496–500）。今後動物を研究するにあたっては、その手法や立場を知ったうえで、必ずしも自らの動物擁護の立場や「動物が好きかどうか」といった主観（Cary Wolfe, *Animal Rites: American Culture, the Discourse of Species, and Posthumanist Theory* (Chicago: U of Chicago P, 2003) 7）に制限されずにアクセスできる方法論として、アニマル・スタディーズが開かれていることが重要である。これらの情報をさらに整理して国内に周知し、日本の動物に関する研究の活性化をはかることが必要である。

（2）日本文学・文化からのアプローチ

（1）①に関連して、今日のアニマル・スタディーズの課題に日本文化・社会の視点からアプローチしていく必要性を認識するに至った。メキシコで開催された Minding Animals Conference 4 では、日本におけるアニマル・スタディーズの発展の経緯と現状、問題点についての口頭発表を行った（５．学会発表⑤）。また、東日本大震災後に書かれた文学と動物についての講演（５．その他①）を担当したことにより、災害と動物のテーマに関する調査を進めた。震災後の人と動物の新しい関わりを知るため、宮城県のいわぬまひつじ村を訪問し、動物が津波の被害を受けた地域の生態系と地域住民のコミュニティを構築している様子を観察した。これに関して、アメリカ・イースタンケンタッキー大学主催の Living with Animals Conference で口頭発表を行った（５．学会発表③）。ここでは、特に自然災害やアニマル・ツーリズムの点から、日本の動物の事例に関心を抱いている海外の研究者もいることを知った。

これらの口頭発表を通しての日本の動物の事例紹介のほか、日本文学・文化からのアニマル・スタディーズへのアプローチとして、本研究では、特に次の二点が成果として挙げられる。

①日本の動物の表象に関する書籍の刊行

日本でのアニマル・スタディーズの理論応用の一例として、平成 30 年 1 月に単著『日本近現代文学における羊の表象――漱石から春樹まで』を刊行した（５．図書①）。ここでは、国内外のアニマル・スタディーズの動向や問題点についても概略を述べ、参考文献を示した。これにより、より広い読者層にアニマル・スタディーズの研究の方法論を提示し、夏目漱石や大江健三郎、安部公房、村上春樹といった日本文学の作品を動物という観点から読み直すことで、新たな解釈を可能とした。羊は明治時代以降、欧化政策と植民地政策によって西欧から輸入された動物であり、その表象は古来中国から得られた知識やキリスト教の影響を受けて構築されている。そのため、従来のアニマル・スタディーズで用いられてきた西欧の理論だけでは包括することが難しい動物観や表象のあり方を見出した。アニマル・スタディーズの方法論を用いて、日本の動物の歴史や表象について包括的に論じた書物は、日本では最初のものであると考えられ、将来の動物に関する研究の枠組みとして参照されうる。

②アニマル・スタディーズの国際的な共同研究への発展

近年の国内の動物に関する研究は、国際的なアニマル・スタディーズの動向として位置付けられる。その成果を海外にも発信していくため、日本におけるアニマル・スタディーズの研究基盤を確立させる必要がある。本研究では、将来的に研究協力者を募り、主要参考文献リストを含めたアニマル・スタディーズの入門書を日本語で刊行することを射程に据えていたが、二年間を通して交流した様々な領域の研究者とともに、各分野の概要をまとめた書籍の出版を着想するに至った。本研究の成果については、この書籍に収められるよう、情報収集した内容の精査と考察を共著予定者とともに行いたいと考えている。今後さらに連携を深め、日本文学やアニマル・スタディーズの学会でのパネル発表も計画している。また、日本での国際研究集会の開催を数年以内に検討しており、国内のアニマル・スタディーズの理解促進をはかるとともに、日本の動物に関心を持っている海外の研究者を日本に招聘し、比較文化的な視点からの研究の進展を目指している。

アニマル・スタディーズの理論と方法論は、文学に限らず、動物に関わる人文学・自然科学の種々の分野において活用されるものであり、既存の学問分野にとらわれない学際的な知のあり方を提供することが想定される。また、アニマル・スタディーズで扱われる問題は、畜産動物の権利、生物の安楽死など、農業、食、医療、福祉といった広範囲にわたる。アニマル・スタディーズは、動物に関わる多くの領域にとって新しい視座となりえ、将来的には、複数の分

野の研究者とともに日本におけるアニマル・スタディーズの発展の可能性を探るための共同研究を実現したい。

（3）アクティビズムとの結び付きと実践

アニマル・スタディーズの学習の機会が提供されている教育研究機関の例や、アメリカ・イースタンケンタッキー大学の協力のもと調査を行ったアニマル・スタディーズの取り組みの例から明らかになった、アニマル・スタディーズの特徴の一つは、アクティビズムとの連携である。アニマル・スタディーズは、生命倫理の立場に基づいた動物の権利・解放の提唱運動と相俟って発展してきた。その研究の主体には、動物保護活動や、日々の食事・衣服の選択におけるヴィーガニズムの実践を行っている者も多く存在する。教育の現場でも、動物保護団体でのインターンシップやボランティアなど、動物と実際に触れ合う機会が提供されている。アニマル・スタディーズでは、文学は動物の表象を可能にするものであり、人間と動物について他の研究領域にはない多くの素材を提供していることに意義があるが、アクティビズムとの関わりにより、従来の文学研究のあり方そのものも変化しつつあるといえる（Mario Ortiz Robles, *Literature and Animal Studies* (London: Routledge, 2016)1, 18）。

このようなアニマル・スタディーズとアクティビズムの結び付きに着想を得、自身の羊に関する研究との関わりから、平成 30 年度より秋田県立大学「つむぎプロジェクト」を始動した。これは、秋田県内の緬羊牧場で不要となった羊毛を活用し、学内の教員や学生、地域のアーティストと協力して作品をつくることで、人・地域・自然をつなげる試みである。羊毛を用いたワークショップや講演会を開催することにより、動物の研究を通した地域貢献・教育活動に取り組み、人と動物の持続可能な関係について実践的に考える機会を提供した。本研究課題の目的や成果の一部を、学外の一般参加者や牧畜関係者とも共有することができた。

文学・文化研究では、人種・階級・ジェンダーの問題が取り扱われてきたものの、自然環境に対する意識がみられなかったことが、エコクリティシズムで指摘されてきた。アニマル・スタディーズの研究・教育活動に見受けられるアクティビズムとの連携やその成果を解明することで、文学研究が環境・社会問題にいかにして実践的に関与していくことができるのか、このような批判に応えていくことができるのではないかと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 7 件）

①Eguchi, Maki, “Colonial History of Sheep in Japan: Eating ‘Genghis Khan’ and Wearing Homespun Clothing,” Oral presentation at Decolonizing Animals: Australasian Animal Studies Conference 2019, The Piano: Arts and Music Centre, Christchurch, New Zealand, 4 July 2019（発表確定済）

②江口真規「読書会報告：村上克尚『動物の声、他者の声　日本戦後文学の倫理』（2017）――アニマル・スタディーズとの関連から読み解く」日本比較文学会東北支部第 19 回比較文学研究会、東北大学、仙台市、2019 年 3 月 30 日

③Eguchi, Maki, “Representation of Sheep in Japan: After the Earthquake, Tsunami, and Nuclear Disaster of 2011,” Oral presentation at Living with Animals Conference 4, Eastern Kentucky University, Richmond, Kentucky, USA, 21 March 2019

④江口真規「文学研究と動物――アニマル・スタディーズの可能性」世界文学・語圏横断ネットワーク第 9 回研究集会、立命館大学、京都市、2018 年 9 月 20 日

⑤Eguchi, Maki, “Animal Studies in Japan: Development and Future,” Oral presentation at Minding Animals Conference 4, National Autonomous University of Mexico, Mexico City, Mexico, 20 January 2018

⑥江口真規「川端康成『伊豆の踊子』における自然の表象――英訳との比較から」日本比較文学会 2017 年度東北大会、あきた文学資料館、秋田市、2017 年 11 月 11 日

⑦江口真規「羊に取り憑かれた者たち――村上春樹作品における羊の「魅惑」」2017 年度第 6 回村上春樹国際シンポジウム、同志社大学、京都市、2017 年 7 月 8 日

〔図書〕（計 1 件）

①江口真規、彩流社、『日本近現代文学における羊の表象――漱石から春樹まで』2018 年、264 頁。

〔その他〕

①Eguchi, Maki, “Animals and Disasters: Reading 3.11 Literature from the Human and Animal Point of View,” 東京外国語大学言語文化学部「世界の中の日本 B」授業内講演、2019 年 2 月 1 日

②平成 30 年度秋田県立大学松風祭総合科学教育研究センター教員企画「つむぎプロジェクト～ふわふわの羊の毛に触れてみよう～」企画担当、秋田県立大学、秋田市、2018 年 10 月 6・7 日

③講演会「「衣文化」を通して「異文化」を学ぶ～インドの染め・織り・紡ぎ～」（秋田県立大学つむぎプロジェクト第 1 回研究会）コーディネーター、秋田県立大学、秋田市、2018 年 8 月

20 日

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。